

なお、本章には、耿定力を耿定理と混同したり（注七四）、『蔵書』に関する「万世治平の書云々」という評語を『焚書』に関するものとして引用する（二三二頁）等、若干の誤りが見受けられるが、いずれも論旨には影響のないものである。

六

上記の如く、本書が我々に提示したのは、倫理道德が政治の支配原理であったことから生じた個人の苦悩と悲劇であり、社会の矛盾であった。本書に於いて著者が、各人の行動が儒家の道德規範によって制限されていたため、法律制度を改造する創造性や国家社会を發展させる技術が官僚集団に欠如し、社会の混乱を招いたという持論を繰り返して述べている所以である。

本書は、万曆十五年という歴史の斬新な断面を描いた好著である。とりわけ、政治史に於ける皇太子冊立問題の重大性を明示したことは、この問題が思想史に於いても検討されねばならない重要課題であることを示している。また、時代思潮を代表する李贄が、個人道德と公衆倫理との調和に苦悩していたことを指摘している点も高く評価できる。本書に示されている多くの独自の見解は、中国の学界にとって刺激となるものである。ただ、中国の読者向けのせい、日本での研究には言及していない点が惜しまれる。しかし、本書の長所

は新しい歴史事実を發掘し、それに関する独自の観点を提示している点であるから、日本の研究者にとっても一読に値するものである。表面上は記すべき事も無いような万曆十五年という年に、大明帝国の發展の限界を看取した著者の見識に敬意を表して、本書の紹介を終わりたい。

（中華書局、一九八二年五月刊、A5判、二五六頁）

寧夏哲学社会科学研究所編

清代中国伊斯蘭教論集

中田吉信

中国のイスラム学界は、久しく沈黙を守っていたが、近年漸く研究活動が開始されたようで、その成果が順次發表され始めた。一九七八年一〇月に『回族簡史』（銀川、寧夏人民出版社、一一六頁）が發行され、一九八二年一月には『撒拉族簡史』（西寧、青海人民出版社、一〇二頁）も出版された。『中国穆斯林』という季刊雑誌も一九八一年後半から刊行されているようである。ここに紹介する『清代中国伊斯蘭教論集』も、こういう一連の研究成果のひとつで、注目に値する論文集と思われる。

本書の「前言」によると、一九八〇年一月、銀川で開かれた「西北五省(区)イスラム教学術討論会」において、各地の同志が「百家争鳴」の精神に基づいて、清代以来の中国イスラム教の諸問題について、いくつかの論文と珍しい資料を提出したが、それらの中から、本書と、『寧夏伊斯蘭教派概要』(勉維霖著、一九八一年七月、一三二頁)、『漫談清真寺』(楊永昌著、一九八一年八月、八一頁)の三書が選ばれて編集されることになったという。勉氏の著書も、楊氏のそれも、いずれも優れた著述であり、しかも今後の研究の礎石となるような史料の価値の高いものであるが、本書は、多くの学者の手に成る論文集であり、現在の中国イスラム学界の動向がよく示されていると思われるので、第一に取上げた次第である。以下、収録されている一四の論文を順次紹介し、若干の私見を附してみよう。

1 李興華「清政府对伊斯蘭教(回教)的政策」(一一四六頁)

清朝の対イスラム教政策の変遷を三時期に分かって考察したものの。第一の時期(一六四四—一七八一)は、「康乾盛世」の時代で、清朝がイスラム教に対し比較的寛容な政策をとった時期。朝臣の中にはイスラム教の禁止を奏するものもいたが、清朝はこれを却けた。第二の時期(一七八一—一八五〇)

は、甘肅の新教徒蘇四十三の「起義」を契機に、清朝の政策が大きく転換した時期。清朝は新教(ジェヘル派)を烈しく弾圧、これに伴い地方官のイスラム教徒に対する疑惑が深まり、一七八二年には「回教文字獄」が起った。また新疆では、コーカンドに亡命したホージャ一族が侵入を繰返した。第三の時期(一八五〇—一九一一)に入ると、雲貴・陝甘・新疆でイスラム教徒の反清活動が大爆発し、ロシア帝国主義の新疆における分裂破壊活動が烈しくなり、清朝の対イスラム教政策は残酷さを増し、「回を以て回を制す」方策がとられるに至った。

李氏は、以上のように論じた後、清朝の政策を次の四点に要約している。

一、大漢族主義を極度に助長し、回漢人民の隔たりを造成した。

二、中国イスラム教各教派間の対立・不和を造成した。

三、イスラム教中の複雑な国際関係を造成した。

四、回族・ウイグル族等の発展に大きな影響を与えた。

李氏の見解には特に目新しいものはうかがわれない。引用史料も概ね実録・奏議等であるが、「軍機処録副」が再三参照されているのが目につく。イスラム教徒の清朝に対する「叛乱」はすべて「起義」として評価されているが、ホージャ一族の新疆への「侵入」は、「祖国を分裂させ、国家統一を破

襲する」との批判され、これに対する清朝の鎮圧は、「祖國統一を擁護し、辺疆を保衛するもの」として、一定の評価が与えられている。左宗棠のヤクープ・ベク討伐、新疆収復についてもほぼ同様である。中国が新疆地区を固有の領土と主張している立場の反映であろう。

2 楊懷中「論十八世紀哲赫林耶穆斯林的起義」(四七一—〇七頁)

一七八一年及び八四年に起った甘肅イスラム教新教徒即ちジェヘリア派の「起義」についての研究で、六〇頁を越す力作である。この論文で最も注目すべき点は、ジェヘリア派内部の記録『哲赫林耶道統史』が用いられていることであろう。この記録は、穆罕默德(ムハンマド)・曼蘇勒(マンスール)・馬智智の手に成るもので、アラビア文で記されているとすることで、本論文では馬忠杰・王有華・蘇敦理の中文摘訳稿が引用されている。最初にジェヘリア派を中国に伝えた馬明心の経歴については、従来の史料は官撰のものが中心で、推測の域を出なかつた。本論文の記述は、恐らく『哲赫林耶道統史』に拠つたのであろう、詳細である。馬明心がメッカ巡礼の旅に出たのが一七二八年(雍正六年)であり、也門(イエーメン)で大イマーム伊本・裁尼から学んだのが乃格什板頂耶(ナクシュバンディヤ)の蘇非派(スーフイ派)の教義であり、帰国は一七四四年(乾隆九年)であつたとい

う。彼の伝えた新教によって、甘肅ムスリム社会に新・旧両教の「争教」が起つたのは、官撰の史料によると、一七六二年(乾隆二十七年)前後であるので、馬明心の帰国は従来一七六一年ごろであろうと推察されていた。それを一七四四年とするのは、いささか早過ぎる感がある。また馬明心が「新教」を学んだ場所も、金吉堂氏のごとく、ブハラとするか、あるいはカシュガル・ヤルカンド地方であろうと考えられていた。しかし、『哲赫林耶道統史』によると、中央アジア經由でイエーメンまで行つたとしているようである。彼の学んだ「新教」がナクシュバンディ派の流れを汲むものであるならば、中央アジアでも可能であつたろう。前掲の勉維霖氏の著書には、この点についての異説も掲げ、松潘、貴州、雲南經由で、ビルマに出て、海路イエーメンに至つたとする説もあるとしている。また一七八四年、長沙で処刑された馬五一等三人を、楊氏は「ジェヘリア派」としているが、この点は疑問である。馬五一は馬来連の孫であるから、「花寺門」である。花寺門はジェヘリア派と抗争した際には「旧教」あるいは「老教」と呼ばれたが、やはりスーフイズムの一派で、同じくナクシュバンディ派に属するかと思われる。従来の伝統的中国イスラム(格迪目・カディムと呼ばれる)とは違つた一派である。『高宗実録』卷一二〇六・乾隆四十九年五月己巳の条に、馬五一等を「堅守新教」と記してあるために、

楊氏は「ジェヘリア派」と誤ったのであろう。

3 馬寿千「清朝同治年間の寧夏回民起義——兼論對馬化竜の評価」(一〇八一—一二三頁)

同治年間の寧夏地区の回民の抗清活動について、その原因、経過を考察し、併せて回民軍の領袖馬化竜の評価を試みたもの。著者の馬寿千は、近年『民族研究』に寄稿しており、中央民族学院の所屬で、『回族簡史』の編輯にも参加している。当時の馬化竜の立場は非常に微妙であった。当初彼は馬兆元等の「起義」に参加することを拒んだ。後に推されて回民軍の総指揮官になったが、蘭州の署陝甘總督穆圖善と妥協し、和平を図った。しかし左宗棠は、彼こそ「叛乱」の巨魁と断じ、その本拠地金積堡を攻略し、彼を処刑したのである。著者の馬化竜に対する評価は好意的のようである。馬化竜は大地主であったが、その意は、故郷を守り、民を安住させることで、「賢明な長官が西北の大局を主持する」ことを待望し、穆圖善にそれを幻想したとする。抗清過程におけるその指導性を、「功勞が主である」と認め、回漢両民族の協調關係を増進させ、農業生産を發展させたとし、その悲壯な最期に同情を示している。

4 納忠「清代雲南穆斯林對伊斯蘭學問的教學與研究」(一四一—一三二頁)

名著『清真指南』を著した明末清初の學者馬注。道光年間

にメッカに巡礼し、カイロ・イスタンブールで学んだ馬徳新。清末の光緒以後盛んになった雲南ムスリムの寺院教育。清末の教育家であり、大學者でもある馬聯元。以上四の項目に分かつて、清代の雲南におけるイスラム教學と研究について記したもの。馬聯元の項で、雲南におけるコーランの翻刻について記されているのが興味深い。馬聯元は、「起義」の領袖杜文秀の支持の下に、中國で始めてのコーランの木版をつくった。これはすべて彼の弟子田家培が手写したもので、三年で完成、すべてで三〇冊であった。一九二四年から二六年にかけて、昆明の沙平安によつて修補され、完全になった。「文化大革命」の際に一部は破壊されたが、大部分は存在しているという。

5 納國昌「伊斯蘭教經學大師馬徳新」(一三三—一四七頁)

前掲の納忠の論文でもふれた馬徳新の伝記。彼の陝西における就學から始まり、メッカへの巡礼、カイロ・イスタンブールでの勉學、帰國後の教育活動、「回民起義」に際しての動き、更に彼の著述等について記している。「起義」に際しての彼の動きは複雑であった。「イスラムと儒教の調和」を志していた彼は、「起義」の当初においては自重していた。しかし、省城で「洗回」が実行されると、回民軍の総指揮をとり、省城を包圍し、雲貴總督恒春を自殺に追いこんだ。ところがやがて新しい總督呉振棫と和解し、和平實現に奔走

し、大理の杜文秀にも和平を勧告した。しかし、杜文秀が自殺し、大理が陥落すると、岑毓英により、叛乱の陰の指導者と看做されて、処刑されるといふ悲劇に終った。彼が中途で清政府と妥協したことが、結局回民側の敗北につながり、これが彼の一大汚点であると著者は記している。しかし、彼の行動を全面的に否定しているのではなく、その功績も認めている。

歴史人物を評論するのに、その一点を攻め、全力を注いで誇大にし、その余に及ばず、ややもすれば人を罪に陥れ、棒で叩き殺し、全面的に否定する。これは歴史学の極左路線下の反動であり、法となすに足りないものである。

人に完全な人はなく、金に純金はない。歴史人物に対するのに、全く責めるばかりのは、行き過ぎたことを免れない。これは歴史唯物主義の態度ではない。

著者はこう結んでいるが、こういう見解は、中国のイスラム学界の自由化を物語るものと解してよいのではなからうか。

6 薛文波「什葉派對中国伊斯蘭教遜尼派的影響」(一四八—一七六頁)

シーヤ派について、その三分派(十二イマーム派・ザイド派・イスマイリー派)を含めて解説し、中東におけるシーヤ

派の状況を記すとともに、中国イスラムとの関係にも言及している。中国のイスラムは、回族、ウイグル族、その他の少数民族のそれを含み、殆んどがスンナ派で、ハナフィー学派に属しているが、歴史的にはシーヤ派の影響も大きく、特に西北地区の「門宦」にはその影響力が強いと言われる。ただ著者によると、バミール山中のタジク族も、大部分がスンナ派で、一部がシーヤ派であるというが、『中国少数民族』(北京、人民出版社、一九八一年)の二三五頁によると、タジク族は十八世紀の始めにシーヤ派のイスマイリー派に改宗したとされている。この点はどうであろうか。

7 馬士年「伊斯蘭教在陝西的傳播發展与演变」(一七七—二一六頁)

陝西におけるイスラムの歴史は興味深い。現在では全省でムスリムの数は僅か五万余であるが、同治年間の「大叛乱」の前には、七、八十万いたと言われる。それが殺戮されたり、省外に追われたりして、西安を除けば、殆んど一掃されてしまったという。本論文は、唐代にムスリムが長安に来てからの陝西イスラムの歴史を述べているが、残念ながら、どうして十九世紀半ばには人口七、八十万、清真寺八百余座という大勢力に発展したかは明らかにされていない。西夏におけるムスリムの存在にふれ、明代におけるムスリムの儒教風習の採用をとり上げるなど、注目すべき見解は散見される

が、肝心な人口増加の過程は解明されていない。

8 馮增烈「明清時期陝西伊斯蘭教的經堂教育」(二一七—二五一頁)

「經堂教育」というのは、中国の清真寺内の經堂で行われる宗教教育のことで、明代の後期、陝西で始まり、その創始者は胡登洲(一五二—一九八)であった。東南の王岱輿・劉智等が、漢文を用い、「以儒詮經」の訳述活動をしたのに対し、西北の胡登洲は、アラビア文・ペルシア文を用い、經堂教育をしたのである。本論文では、清真寺の組織と經堂教育の構成、課程、語文、文字等について詳しく記され、胡登洲の弟子の系譜も示されている。しかし、胡登洲自身の詳しい経歴は明らかにされていない。

9 陳慧生「試論清代白山派和黑山派之間的鬭爭及其影響」(二五二—二八九頁)

新疆におけるイスラムの二派(白山派と黒山派)の争いの沿源、ジュンガル帝国及び清朝の対策、コーカンドに亡命した白山派のホージャ一族の活動等を概観したもの。これらについては、わが国では羽田明・佐口透・嶋田襄平等の各氏の優れた研究があり、漢文史料にとどまらず、西方史料、ロシア語史料が十分に駆使されている。しかし、陳氏のこの研究は、実録、西域図志、西域聞見録等の漢文史料に限られ、社会経済的分析もされていない。両派の争いから生じた白山派

の清朝に対する「叛乱」には、国家統一と民族団結を破壊するものであると、否定的評価が下されている。

10 馬辰「馬元章与哲赫林耶教派的復興活動」(二九〇—三〇七頁)

これはジェヘリア派沙溝門宦の教主馬元章(一八五四—一九二〇)の経歴を、曾孫に当たたる著者が、父の話や、曾祖父の記した原稿、官府との往復文書に基づいて記したものである。馬元章は、一七八一年に殉教したジェヘリア派の創始者馬明心の四世の孫に当たるといい、その父馬世麟が雲南で杜文秀の「起義」に参加し、通海で清軍に包囲された時、父の命令で秘かに脱出、甘肅に潜行し、張家川に居を定め、金積堡で殉教した馬化竜の弟馬成竜の娘を娶り、馬化竜亡き後のジェヘリア派を復興した人物である。清末から民国初年にかけて、甘肅ムスリムの尊崇を一身に受け、「馬善人」と呼ばれていたことは、在華宣教師の記録にも見える。従来、ジェヘリア派の系譜や、その復興運動については、佐口透氏をはじめ幾多の識者の記述があったが、いずれも断片的で、しかも出入、矛盾が多かった。馬辰の記述は、直接その流れを汲んだものの記述だけに、史料の価値も高いと思われる。しかし、ここで注目すべきことは、日本人ムスリム川村狂堂氏の記述である。川村氏は昭和二年、北京で雑誌「回教」を出したが、その第一巻第二号に掲載された「馬元章」の記載は、殆んどこ

の馬辰の記述と符合している。「此の派に多少の関係を有つてゐる」と自称してただけに、私がかねてからこの川村氏の記述に注目し、引用したこともあったが、やはり相当信憑性のあるものであった。

11 治正綱「寧夏伊赫瓦尼著名経学家虎嵩山」(三〇八—三二五頁)

これは寧夏地方で伊赫瓦尼 (Ikhwanī) 兄弟の意) 運動を推進した虎嵩山の業績を記したものである。このイフワーン派は甘肅の馬万福が始めたもので、「遵経革俗」を主張、イスラムの教法を遵守し、教法に合わない風習を取除くことを唱えた一派である。恐らく、十九世紀の後半になって、中国ムスリム社会は、西方イスラム本地との連絡が密接になり、学説や生活の面で大きな影響を受け、従来の中国的風習との妥協に對する反省が起つたためであろう。虎嵩山は門宦の一である「虎非也 (Khatfeh)」の出であり、その父は門宦の「海里凡 (ハリーフア)」であつたといふ。

12 馬汝鄰「従回民不吃猪肉談起」(三二六—三三九頁)

回民が豚肉を食べない風習について考究したものである。豚を食べないのは、回族だけではなく、イスラム教信仰民族共通の風習であり、ユダヤ教徒も同様である。更に溯れば、古代エジプトや中東でも、豚は不潔とされ、神に供せられなかつたといふ。この豚の問題が、中国では長い間、回漢對立の大き

な原因となつていたが、人民政府の成立後、各地の人民公社で、養豚や、豚の糞尿の利用について、回族の方からの歩み寄りが報せられていた。しかし、回民の養豚は林彪と四人組の強迫によるもので、回民群衆の怒りの反抗を引き起したと記している。

13 魏英邦「論外国学者对中国伊斯兰教的研究及伊斯兰教之“五性”」(三四〇—三六四頁)

諸外国のイスラム研究に始まり、中国イスラムについてのヒルト、ワシリエフ、ダブリ・ド・ティエルサン等の研究を紹介し、最後にイスラムの「五性」(長期性・群衆性・民族性・国際性・複雑性)、特にその中の国際性に重点をおいて論じている。欧米の研究は戦前のものに限られ、日本の研究にはふれていない。アイザック・メイソンの中国イスラム文献目録の紹介に頁をさいている。

14 陳恩明「現代西方伊斯兰教研究情况简介」(三六五—三七六頁)

主として戦後における欧米のイスラム研究の状況を紹介したものである。研究領域が拡大され、研究活動が深まり、現状に重点がおかれ始めたことなどを記している。特に参考になるものではない。

以上一四の論文を通読して、まず感じたことは、中国イス

ラム学界が、本格的研究に取組み始めると同時に、「自由化」への道を歩み出したことである。「百家争鳴」の精神に基づいたと称するだけに、従来の歴史学論文に見られる画一的、教条的歴史観ではなく、自由に自己の意見を開陳したと思われる論文が多い。『毛沢東選集』からの引用も、一、二箇所

に止まっている。またこの論文集が「中国伊斯蘭教」という立場で編集されたことも意味が深い。一九四九年以降の中国では、ソ連と同じく、イスラム教徒全体の「文化的自治」よりも、「地域的自治」乃至は「民族的自治」が優先され、そのためであろうか、文化制度としての「イスラム」にまとめられた歴史よりも、「回族」とか、「ウイグル族」とか、民族史の立場で書かれた歴史の方が優勢であった。本書の寄稿者は、その姓名から推測すると、回族（あるいは東郷族も）に限られ、ウイグル族等トルコ系ムスリムは参加していないようである。しかし、新疆のイスラムの歴史もとりあげられ、清代の中国イスラム全般を扱う論文集を目指したように感ぜられる。ただ残念なことに、トルコ系諸民族の学者が寄稿しておらず、新疆のトルコ語系現地語の史料も用いられていない。しかし、新疆のトルコ語系史料は相当数あるようで、程瀚洛氏が『民族研究』一九八二年第一期に発表した「中外有關維吾爾族史的研究」によると、一九五〇年代に民族調査班がこういう史料を相当数収集したようである。これらが利用

され、トルコ系ムスリムの学者も参加して、新疆のイスラムの歴史が書かれることを期待したい。

本書にはジェヘリア派についての論文が三点あり、イフワーン派についての論文もある。いずれも両派を非難攻撃しておらず、むしろ好意的である。これはこの両派の力が西北地区で相当強いことを裏書きするものではなからうか。一九五八年八月から九月にかけて銀川で開かれた回民座談会で、ジェヘリア派沙溝門宦教主馬震武は、「反共反人民反社会主义」の罪行で、徹底的に批判された。ジェヘリア派はこの批判によって潰滅的打撃を受けたのではないかと想像されたが、そうではなかったらしい。イフワーン派への批判については知るを得ないが、かつての寧夏の回民軍閥馬鴻逵は、この派の擁護者で、治正綱氏のとりあげた虎嵩山の後援もしていた。人民政府の成立後、この事実はとりあげられなかったであろうか。しかし、勉氏の研究書によっても、ジェヘリア派も、イフワーン派も相当数の信徒を抱え、その勢力は侮り難いようになりうかがわれる。また北京では、かつて「右派分子」として槍玉にあげられた馬松亭も近年復活したらしい。中国のイスラム界は、伝統的なものの復活、新しい動き、それに国際関係、特にイスラム世界との交流がからみあって、複雑な様相を呈しているのではあるまいか。

（銀川、寧夏人民出版社、一九八一年二月刊、三七六頁）